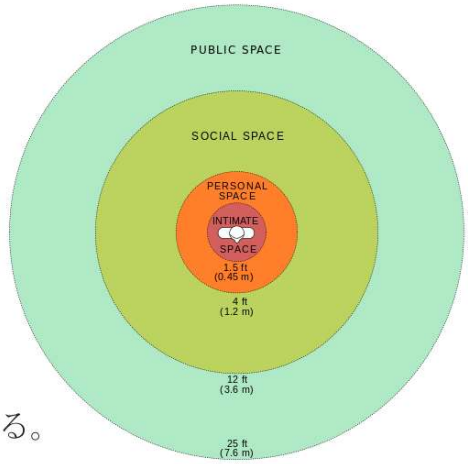
コロナ禍によるソーシャルデスタンス

ソーシャルデスタンスという言葉をどこかで聞いたことがあるのだが。そうだ、建築計画で設計を行うにあたって教わった言葉でした。それがコロナ禍で実際に距離をとって並ぶようにとの上からお達しの言葉でした。実際にコンビニやスーパーの入口に皆さん並んでいました。この話は、ウィルスが含まれる飛沫を吸い込まないようにとの安全距離を保ための距離間です。

建築でのこの言葉の意味はそれと違って、パーソナルスペースの概念で他人に近付かれると不快に感じる空間のことで、パーソナルエリア、個体距離、対人距離とも呼ばれています。



一般に、親密な相手ほどパーソナルスペースは狭く（ある程度近付いても不快さを感じない)、逆に敵視している相手に対しては離れる。相手によっては（ストーカー等）距離に関わらず視認できるだけで不快に感じるケースもある。

パーソナルスペースの分類

類型	概要	近接相	遠方相
密接距離 （intimate distance)	ごく親しい人に許される空間。	0 – 15 cm 抱きしめられる距離。	15 – 45 cm 頭や腰、脚が簡単に触れ合うことはないが、手で相手に触れるくらいの距離。
個体距離 (personal distance)	相手の表情が読み取れる空間。	45 – 75 cm 相手を捕まえられる距離。	75 – 120 cm 両方が手を伸ばせば指先が触れあうことができる距離。
社会距離 **（social distance)**	相手に手は届きづらいが、容易に会話ができる空間。	1.2 – 2 m 知らない人同士が会話をしたり、商談をする場合に用いられる距離。	2 – 3.5 m 公式な商談で用いられる距離。
公共距離 （public distance)	複数の相手が見渡せる空間。	3.5 – 7 m 2者の関係が個人的なものではなく、講演者と聴衆と言うような場合の距離。	7 m 以上 一般人が社会的な要職にある人物と面会するような場合におかれる距離。

建築設計に際してこの距離間を意識して空間設計を考えるようにすること。例えば、避難所生活で多くの人たちと集団でいるとストレスが大きくなってきます。そのために仕切りなどで個人的空間を作ると安心感が得られます。また図書館やレスランの席で隣と近いと落ち着きません、などで設計を考えます。

　このコロナ禍でソーシャルデスタンスは、今後社会生活のなかに根づくでしょうか。満員電車の解消、劇場や野球のスタンドの席、などの間隔がより多くの人を入れるため狭い間隔になっています。コロナ禍のソーシャルデスタンスほどでなくとも余裕のある間隔にできるでしょうか。
　野外コンサートなどはぎっしり込み合っている環境が盛り上げるのでしょうが、何かと危険が感じられますので、ほどほどにしたいものです。

※表と丸、文章の一部はWikipediaより、画像はフリーサイトより

2020.7.5